

佛說鬼子母經

佛遊大兜國。時國中有一母人。多子性極惡。常喜行盜。人子殺噉之。亡子家亦不知。何誰取者。行街里啼哭。人已還共議。如是非一日。阿難及眾沙門。出行輒見啼哭人。已還共議。傷哀亡子家。佛即知眾沙門議。佛到眾沙門所。佛問眾沙門。向者何等議。眾沙門。阿難白佛言。向者出行分衛。見街里有啼哭人。眾多。即問啼哭人。汝何為啼哭。報言。生七我子。不知屍死處所。如是啼哭者。非一家皆亡子。

佛便為阿難眾沙門說。是國中盜人子者。非凡人故。現鬼子母。今生作人。喜行盜人子。是母有千子。五百子在天上。五百子在世間。千子皆為鬼王。一王者從數萬鬼。如是五百鬼王。在天上燒諸天。五百鬼王在世間。熾帝王人民如是。五百鬼王天亦無奈何。

阿難白佛言。鬼子母來在是國中。今寧可救令不盜人子耶。佛言。大善。可令不復盜人子。阿難問佛言。當用何等方便。使不復盜人子耶。佛便語阿難。到是母所居。眾沙門共伺是母。出已。後悉斂取子。來著精舍中。逃之。

眾沙門即往。伺是母出行。隨後斂取子。得千數子。逃著精舍中。是母便復行盜人子。來入舍中。不見其子。便捨他人子。不敢復殺。便行索其子。遍舍中不知其子處。便出行至街里。遍城中不得。復出城外。索不得。便入城行道啼哭。如是十日。母便狂。被髮入市。啼哭自擗撲仰天。大呼為狂梁語。亦不能復飲食。

佛遣沙門往視之。見母問。何為市中被髮啼哭。母即報沙門言。亡我子。眾多故哭耳。

沙門言。汝欲得汝子不。母報言。我欲得之。沙門言。汝審欲得者。是間有佛。可往問佛。佛者知當來已去之事。汝往則可得汝子。母聞是語。則歡喜意解。便隨沙門。

去到佛所。歡喜前為佛作禮。佛即問母。何為市中啼哭。母報佛言。亡我子。故佛問母。汝捨汝子至何所。而亡汝子。母即默然不言。佛復問母。汝捨子至何所。而反默然無語。母知盜人子為惡。母即起。為佛作禮。頭面著地。我愚癡。故佛復問。汝有子愛之。不母言。我有子坐起常欲著我。傍佛復問。汝有子知愛之何故。日行盜他人子。他人有子亦如汝愛。

之七子家亦行道。啼哭如汝。汝反盜人子。殺噉之死。後當入太山地獄中。母聞是語。便恐怖。佛復問。汝寧欲得汝子不。母即起復持頭面著地。願哀我佛。便語母言。汝子若在。汝寧能自悔不。

若能自悔。當還汝子。母言。我能自悔。佛言。汝能自悔。當作何等自悔。母言。我聽佛教誡。當隨佛語。自悔。佛還我子。我不敢遠離佛所。語佛言。審如汝語。不母言。我審如佛語。佛便授以五戒。第一不殺生。第二不盜。三不姦。四不兩舌。五不飲酒。報能悉還其子。

佛便為說汝有千子。皆為說千子名字。五百子在天上。皆是鬼中王。將鬼官屬。嫉害熾天民。五百子在世間。熾諸人民。汝子作鬼王。將數萬鬼。如是五百子。將鬼官屬。一不可稱數。極嫉害惡。或

自稱作樹木神者。或作地神者。或作水神者。或詐為人兄弟妻子。自怨枉家室。內外者。或作海神者。或作船車神者。或

作舍宅神者。或自稱夜在冥中神者。或使人夢寤者。或使人恐怖爲人作怪者。或自稱星死者。自稱病死者。如是耗亂人。適不在一處。極嫉害惡。如是矯稱令人祠祀烹殺。人不知多爲烹殺。飲食是鬼。是鬼亦不肯食。端嫉害欲使人犯殺。欲使人入地獄中。要不食之。見人祠祀喜。如是鬼亦不能護活人命。但益罪。愚癡人不知坐鬼貧窮。鬼子母聞佛說是語。即一心自悔。即得須陀洹道。知方來去事。長跪白佛言。我愚癡不知。世世有惡。乃爾今我得持戒。思惟中正之道。我心皆徹視。還見我千子。今我乃知佛所至。至語成。願佛哀我。我欲止佛精舍。我欲呼千子王。我欲使與佛結要。我欲報復天上天下人恩。佛言善哉。如汝有是意。大善。佛言。汝從是已去。當稱是語。便止佛精舍邊。其國中人民。無子者來求子。當與之子。自在所願。我當教子。姓與使隨護人。不得復妄毀之。欲從鬼子母求願者。名浮陀摩尼。婦名炙。匿天上天下鬼屬。是摩尼主。四海內。船車治生有財產。皆屬摩尼。摩尼與佛結要。受戒主護人財物。炙。匿主人。若有產生當救之。有天王名毘沙門。主四天地。護人命。出入常。從毘沙門求願。有大鬼王。名阿須倫。主諸龍王。諸毒氣人。從求願。令毒不干人。求願當慈心。無所用謝。亦無所噉。食人。從求願者。在人何求。與耳。要無所求。索亦不責人。人至浮陀摩尼。前爲作禮。

佛說鬼子母經。

仏説鬼子母經（意識）

ある時仏は大兜国を巡つていらつしやいました。その時この国には一人の母親がいました。この母親には多くの子供がいました。たがその性格はとても凶暴で、いつも他の人の子供を盗つてはこれを殺して食べていました。

こうして子供を失つた家では誰が子供を殺したのか分からず、我が子を探して街中を歩き悲しみのために泣き叫びました。人々がこの問題を解決するために語り合うこと数日に至りました。

仏の弟子である阿難やその他の修行僧達もこのようにして子を失つた親の話聞き修行場へと還つて、皆でその子を失つた家の事を哀れに想い悼んでいました。

仏は弟子達が話し合ひをしているのを知り、その集まりへといらつしやいました。

仏は弟子達に問われました。「先程から皆集まつて何を話し合つているのだ。」

そこで阿難は仏に次のように申し上げました。

「私達は先程乞食行のために街へとでかけて行き泣き叫ぶ人々を多く見ました。そこでどうして泣き叫んでいるのかと尋ねてみますと次のように答えました。我が子を失いました、しかもどこでどうして亡くなつたのか、その理由が分からないのです、と。このように泣き叫ぶ家に一軒として子供を失つていない家はありませんでした。」

そこで仏は阿難とその他の弟子達のために次のように話をされました。

「この国で人の子を盗つている者はおよそ

人ではない。鬼子母が現世で人として姿を現わし人の子を盗っているのである。この鬼子母には千の子がおり、その内五百が天上に、残りの五百は地上にいるのである。

この千の子は全て鬼の王であり、それぞれが数万の鬼を従えているのである。天上にある五百は諸の天神を煩わし、地上にある五百は今回の件のように王や人民を煩わしている。天上の鬼王はどうしようもない。」

阿難は仏に尋ねました。

「鬼子母自身は現在この国にいます。どのようにかして人の子を盗らないようにすべきではないでしょうか。」

仏は次のように答えられました。

「よく言った。二度と人の子を盗らないようにすべきである。」

そこで阿難は仏に尋ねました。

「どのようにすれば二度と人の子を盗らなくなるでしょうか。」

仏は阿難に次のように語られました。

「皆でこの鬼子母の住む所へと訪ねて鬼子母が外へ出るのを待ちなさい。その後捕らえられた子供と共にこの祇園精舎まで逃げて来なさい。」

弟子達はすぐに鬼子母を訪ね外へと出るのを待ち、十数の子を連れて祇園精舎まで逃げてきました。鬼子母は人の子を盗って住处に戻ると自分の子供がいません。盗った子供には目もくれず我が子を探しまわりましたが遂に見つからず、街へ戻り城中を城外をも探し回りましたが手がかりさえつかめませんでした。遂に鬼子母は街の中へと戻り道端で途方に暮れ泣き叫びました。

このようにして十日が経ち、鬼子母は

狂ったように髪を振り乱して市場へと入り、胸を打って悲しみ地へ倒れ込んで天を仰ぎました。その大きな叫び声は言葉をなさず、食物も飲物さえも喉を通ることはありませんでした。

仏は弟子の一人を遣つかわしてこの様子を見に行かせていました。この弟子は鬼子母に尋ねました。

「どうしてこんな市場の中でそのような姿で嘆き悲しんでいるのですか。」

鬼子母は答えました。

「我が子を多く失ってしまったので嘆き悲しんでいるのです。」

弟子は答えました。

「するとあなたは我が子を捜しても見つからない、というのですね。」

鬼子母は言いました。

「我が子を取り戻したい。」

弟子は次のように言いました。

「あなたが本当に我が子を取り戻したいと願うのであれば、少し行った所に仏がいらっしゃいます。そこに行つて仏に問いなさい。仏は過去から未来に至るまであらゆることをご存知です。仏の所へ訪ねれば必ずあなたの子を取り戻すことができるでしょう。」

これを聞き鬼子母は喜んでこの弟子に随つて仏を訪ね、そこで嬉しさのあまりに仏に礼拝しました。仏は鬼子母に尋ねられました。

「どうして街の市場でそれ程に歎き悲しんでいたのか。」

鬼子母は仏に申し上げました。

「我が子失つたためです。」

仏は母に尋ねられました。

「お前は我が子を置いて何処へ行つていたのだ。」

鬼子母は黙って答えませんでした。仏は再び尋ねられました。

「お前は我が子を置いて何処へ行つたがために子を失うことになったのか。」

鬼子母は人の子を盗ることが大變な悪行であることを知りました。鬼子母は起ち上がり再び仏に礼拝し、頭を地につけて平伏しました。

「私が道理も知らない愚か者であつたからです。」

仏はさらに尋ねられました。

「お前は我が子を持ちながら我が子に対して愛情を持たないのか。」

鬼子母は答えました。

「私は傍から子が離れるのが堪えられない程に我が子を愛しています。」

仏はまた尋ねられました。

「お前は我が子を愛しているというのに、どうして日に日に他の者の子を盗るようなことをするのだ。他の者もお前のように我が子を愛し、その子が亡くなれば同じく道端で悲しみに暮れ泣き叫んでおるのだ。それをお前は人の子を盗つては食べているのではないか。お前は死んだ後に太山地獄たいざんじごくに墮ちるであらう。」

鬼子母はこの言葉を聞き恐ろしさに身を震わせていました。仏はまたさらに尋ねられました。

「お前は本当に我が子を取り戻したいと思ふのか。」

鬼子母は体を起こして再び平伏してこう

言いました。

「どうぞ私をお救い下さい。」

仏は鬼子母に語りかけられました。

「お前の子がもし還るならば、お前はよく自らを顧かえりみて反省するか。もしよく自らを顧み反省するのであれば、お前の子を還してやろう。」

鬼子母は答えました。

「これまでを顧みよく反省します。」

仏はおつしやられました。

「お前は自らを顧みどのよう反省するか。」

鬼子母は答えました。

「私は仏の教えと戒めをよく聴きその言葉に従つて反省します。仏よ、どうか我が子を還して下さい。私はあなたの言葉が届かない所へ逃げるようなことはいたしません。」

仏はおつしやられました。

「お前の言葉に偽りは無いであらうな。」

鬼子母は答えました。

「はい、仏の言葉に従います。」

仏は鬼子母に五種の戒めを授けられました。その第一は生き物を殺さないこと、その第二は物を盗らないこと、その第三はみだりに異性を求めないこと、その第四は嘘をつかないこと、その第五は酒を飲まないことであり、この戒めを正しく伝えて鬼子母の子を全て還しました。

仏はまた次のように説かれました。

「お前には千の子がおりそれぞれが悪行をしておる。その内五百は天上で皆鬼の王として天上の人々を煩わせている。また残りの五百はこの地上で人民を煩わせており、

お前の子に従う鬼は万を数える。これらの悪行を一一説明することはできず、天地の人々を妬み苦しめることこの上ない。

例えば自ら樹木神となる者、また地神となる者、また水神となる者、また人の兄弟や妻子となり家族や友人などの関係を悪化させる者、また海神となる者、また船車神となる者、舎宅神となる者、また夜在冥中神となる者、また人の眠りを妨げる者、また人を恐怖に陥れる者、また人に猜疑心を抱かせる者、また星死と名乗る者、また病死と名乗る者など、このように天地を乱れさせる者達である。常に同じ場所に居らず天地の人々を苦しめる。

この者達の悪事とは、人々に供物として生贄の殺生をさせ、それを食べさせるが、この鬼の王たちは食べようとしないうことである。ただ妬み苦しませて人に殺生の罪を犯させ、地獄の世界へと入らしめようとするだけである。つまりその供物を食べず人々が生贄を捧げるのを見て喜ぶだけである。このように鬼は人命を護り活かすことができず、ただ罪を増やすのみである。愚かな人はそのことを知らない。鬼のために生活に苦しむのである。」

鬼子母は仏のこの言葉を聞きたただただ一心に己の罪を悔いました。そのことによつて聖者として生れ変わり、第一段階である須陀洹の悟りを得て過去から未来の事を知る力を得ました。

鬼子母は両膝を地に着けて仏に申し上げました。

「私は愚かで何も分からずこれまでこのよ

うな悪事ばかり働いておりましたが、今私は仏より戒めを授かり偏りのない正しい道のみを歩む気持が芽生えました。私の心は一切を見通し今また我が千の子の事とも見通すことができます。仏のいらつしやる所に偽りのない言葉も宿ります。どうぞ私の願いを聞いていただけますか。

私は仏がいらつしやるこの祇園精舎に私の子である千の鬼の王たちを呼んで共に留つても構わないでしょうか。どうぞ仏と私達の縁を固く結び、これまで天上や地上より受けた多くの恩をお返しさせて下さい。」

仏はこの言葉を聞き次のようにおっしゃいました。

「よく言った、お前のその想いは人々を幸せにするであろう。」

仏はまたおっしゃいました。

「お前はこれから先今の言葉をかならず実行しなさい。つまりこの地上にいる人々で求めているにもかかわらず子供がいない者には子供を与え、その性別も願いを聞き入れてあげなさい。またその者に苦しみや煩いを被らないように護つてあげなさい。」

このように鬼子母に付き従い求願する者の名を浮陀摩尼鉢と呼ぼう。また付き従う鬼たちは灸匱と呼ぼう。この摩尼鉢は地上において、船や車を含めこの四海の全てを治めており、今仏である私はこの摩尼鉢と固く縁を結ぼう。この戒めを受けてよく人と財産と物とを護りなさい。また灸匱は人とその生産物を治めこれを利益するであろう。

天上界にも王がおりその名を毘沙門という。毘沙門はこの地上界を治め人命を護り、

常に毘沙門より出入りする。

一方求願する偉大な鬼王の名を阿修羅あしゅらという。阿修羅は諸の龍王を治め人々に苦しみや憎しみを与えているがその影響は千人に及ぶことはない。つまり求願とは慈悲の心であつて悪意のために用いるものではない。ましてや人を盗つて食べるためのものではない。つまりは求願する者のためにありその人が求めるものを与えるだけであり、要求したり人を責めるものではない。そうであればこそ人々は浮陀摩尼鉢となつて、鬼子母を敬つて礼拝するであらう。」